

遙々と来てみたが・・・タソガレ隊の欧州アルプス

～久し振りの海外 4000m 峰登頂 ブライトホルン他～

◎期日 2014年7月9日～24日（シャモニー、ツェルマット、グリンデルワルトの全行程）

◎メンバー 奥州アルプスタそがれ隊（山なかまシリウス4人）

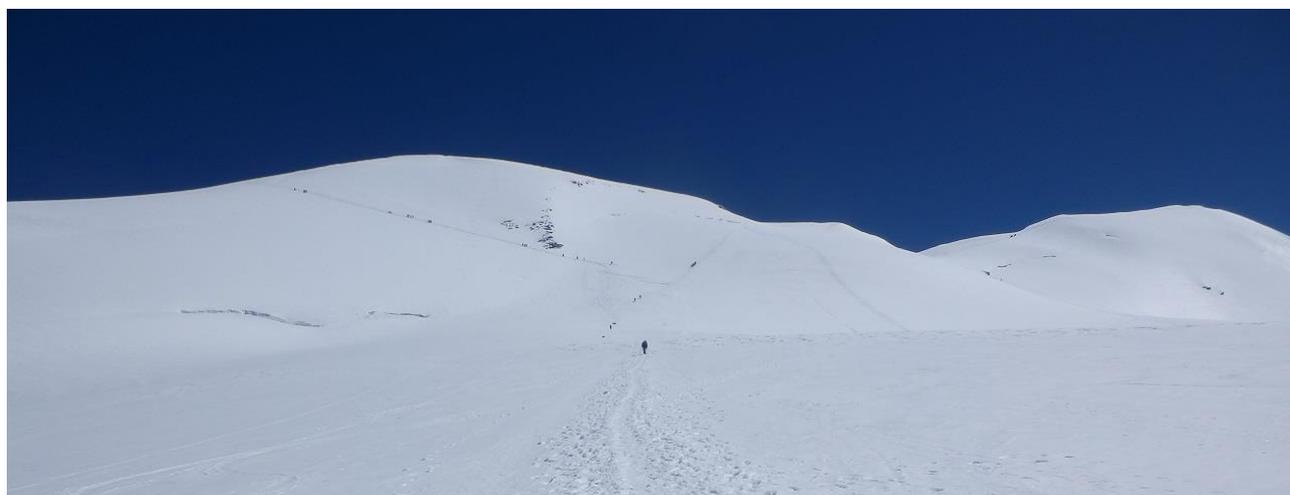
広大な長い長い雪の斜面をウンウン唸りながら、ヨタヨタと登って行った。秀麗なマッターホルンが始終後方に眺められ、また登山口であるクライン・マッターホルンの針峰も直ぐ足下に屹立していて素晴らしい景観であったが、ヨロヨロの私メにはこれらの景観を楽しむ余裕は残念ながら無かった。



（ブライトホルン中腹をヨタヨタと・・・）

ここは、スイスのツェルマットからロープウェイで小1時間ほどの終点「マッターホルン・グレッシャー・パラダイス」と呼ばれるスキー場駅のトンネルを出てから、目の前に広がる広大なブライトホルン(4164m)をその中腹まで登って来た所である。沢山のパーティーが入山していて、広大な中腹のトレースにポツポツと連なって登って行く。

ガイドパーティーや若者パーティーが多いようだ。我がパーティーは全てのパーティーに道を譲ったが、我々が追い抜いたパーティーは1パーティーも無かった。他の3人は元気モリモリであったのだが、トップを行かされる小生の足並みがどうにも遅れ気味なのであった（上のヨタヨタ写真参照）。



（ブライトホルンの広大な斜面に付けられたトレースに点々とパーティーが・・・）

さて、この続きは後述するとして、話を初っ端に戻そう。

アカさんから欧州アルプスに行かないかとお誘いを受けたのは昨年の秋頃のことであった。彼は若い頃モンブランにもマッターホルンにも登っていて、特にモンブランはガイドレスで登ったそうで、アルプス事情にも精通しているので、何かと心強い。馬が合う4人でパーティーを組み、正月過ぎには早々と飛行機もアルプスでの宿も全て予約を完了してくれた。4人とも古稀を越えているので、「アルプスタそがれ隊」と命名し、ややこしい山は敬遠してタソガレに相応しい易しい山々をターゲットとして選んで貰った。その結果、下記の3地域をそれぞれ約5日間づつとして、それぞれの地域のターゲットは以

下のような 4,000m 峰となった。

◎シャモニー（フランス）：モンブラン・デュ・タキュール（4248m）

◎ツェルマット（スイス）：ブライトホルン（4164m）

◎グリンデルワルト（スイス）：メンヒ（4207m）及びユングフラウ（4158m）

ガイドを雇えば安全性は増すであろうが、我々タソガレ隊にはガイド登山のスピードに付いて行ける体力も無いので、“ハイッ、ここでオシマイ！”とリタイアさされるのがオチであるから、気儘なガイドレスの個人登山とした。

いずれも氷河上の歩行がある山なので、クレバスに墜落しない歩き方やアンザイレン法、コンテの方法、クレバスからの登り返しや引き上げ法なども谷川岳や富士山などで実地訓練を行い、また、高度順応のために何回か富士山にも登った。しかし、前者のクレバス墜落からの登り返しや引き上げは、我々「たそがれ隊」のルートには実際には難しいことが分かったので、アンザイレン中の誰かがクレバスに墜落したら他の 3 人で墜落を途中でストップさせることが関の山であって、その後のレスキューはたまたま通りかかったガイドが居ればガイドに頼むか、或いは気の毒だが“見捨てざるを得ない”という暗黙の了解の上に事が進んでいった。以下、冒頭のブライトホルンに戻るまでの間、現地での日程の順番に山行の様子を簡単に記すこととする。

さて、格安のトルコ航空機でイスタンブール経由チューリッヒに到着した我々は、電車でまずはフランスのシャモニーに入った。シャモニーでは生憎の天候で、滞在した 4 日間、山はおろか山麓も雨やガスの中で山々の姿を拝むことはできなかった。高度順応を兼ねてロープウェイでグランモンテ (3275m) を往復したり、ブレバン (2525m) へのハイキングもしたが、いずれも五里霧中の雪や雨の中であった。

シャモニーでのターゲットであるモンブラン・デュ・タキュールの登山情報を得ようと街の登山情報センターに立ち寄ったところ、モンブラン付近は先日から降雪で雪崩の危険が迫っているためにタキュールへのガイド登山は全て中止となっているので、絶対に登らないようにとのことであった。その替り、“安全で易しい”山を推薦するから、そこに登ったらどうかと提案してくれたのが、タキュールの手前の Pointe Lachenal という 3616m トリプルピークの縦走であった。

センターのオニイサンの話では、ここは雪が貼りついた岩山であり、懸垂下降や急峻なガリー登攀もあるが、ヨセミテデシマルで 5.6 程度のクライミングで易しいからと薦めてくれた。ガイドブックの写真も見せてくれたが、そのガリーが急峻そうであったので、もう少し詳しく聞いてみると、「カムが 2、3 本必要だが、持っているか」と言うので、今回は持って来ないと答えると、それではカムは無くてもシュリングを岩角に結べば何とか支点になるよとのご託宣であった。



(Pointe Lachenal 3 座。現地 HP より引用)

そういう訳で、シャモニーでのターゲットを急遽 Pointe Lachenal に変更して、宿に帰ってセンターのオニイサンがコピーしてくれたガイドブックを仔細に検討した結果、オニイサン推薦の 3 座縦走はガイドレスの我々には難しそうなので、雪稜沿いに登れる主峰 1 座だけにピストンをすることにした。実際に現地に行ってみてガスの僅かな切れ目から覗き見た限りでは、急峻なガリーは氷が張りついたミックスになっていて、とても 5.6 には見えなかった。我々の感覚では 5.9 くらいな気がした（海外のグレーディングは、同じ YDS でも日本のそれよりも +0.2 程度の感覚になっていることが多い）。



さて、翌朝一番のテレフェリク・ロープウェイに乗りエギュ・デュ・ミディ駅(3842m)から急峻な雪稜をコル・デュ・ミディのプラトーまで下ったが、濃いホワイトアウトで周囲の状況が全く分からなかった。タキユールも全く見えなかったが、その方向の下部に我々が目指す Pointe Lachenal が僅かなガスの切れ目から覗けたので、ホワイトアウトの中を登ってきた。



(Pointe Lachenal 山頂のアカさん)

さて、シャモニーでの悪天を補償してくれるかのように、次に移動したスイスのツェルマットでは好天が続いた。ツェルマットは街のどこからでもマッターホルンが眺められるが、我がタソガレ隊にはお呼びではないので、欧州アルプスでも一番登り易い山のひとつであるブライトホルン 4164m をターゲットに選んだ。

この山は、標高 3883m までロープウェイで登れるので、山頂までは残り標高差 300m 弱の登高で済むとルンルン気分ツェルマットの街を出発したのであったが、なかなかどうして足弱の小生には手強い山だった。山麓のツェルマットから見ると、手前のゴルナーグラートの丘の向こうにほんの雪のコブか乳首のような小さな山にしか見えないが、近づいて見ると山頂部の絶壁の上に巨大な雪庇が覆い被さっているどっしりした大きな山容であった。



(ゴルナーグラートからブライトホルンを望む)

ツェルマットから乗ったロープウェイは、途中の支柱間のスパンが非常に長くて、また深い渓や急峻な山稜を跨いで行くスリリングな乗り物であった。マッターホルンがその角度を変えながら始終右手に見えた。R/W 終点のマッターホルン・グレッシャー・パラダイス駅(以前のクラインマッターホルン駅)を出てからアンザイレンした。ブライトホルンへはしっかりしたトレースが付いていて、このトレースをキープしている限りはクレバスに落ち込む危険は無いと思われたが、万が一ホワイトアウトになればどこにヒドゥン・クレバスが隠れているかも知れないので、定石どおりアンザイレンしたのであった。これ以降のことは冒頭に書いたとおりであるが、以下冒頭の続きを書く。

アカさんや皆さんに叱咤激励されて、トボトボヨタヨタとブライトホルン中腹の長い長い雪の斜面を登って行った。歩き始めてまだ2時間も経っていないのに、このシンドさは一体何であるのか。出発前には高度順応のために富士山にも登ったのに、どうも高度順応ができていないのかも知れない。或いは、

もう高い山には登れないロートル虚弱体質に落ち込んでしまったのか！？。コン畜生メ。

尻を叩かれながら長い長いジグザグをやっとの思いで登り切ると、360度の展望が一気に開けた。もうここより高い地面は無かった。助かった！そこはスイス・イタリア国境の細長い頂上の一角であった。西にはマッターホルンのピラミッドが旗雲を伴って天を突き、東側には欧州アルプス第2の高峰モンテローザが広大なゴルナー氷河の上に君臨していた。足下には登山口のクライン・マッターホルンの尖峰が屹立しているのが見えた。

涙目になって景色が霞んできた。

何を隠そう、海外登山は何回もやってきたが、ハイキングやトレッキングを除けば、自慢ではないが未だ目標の高山の頂上に立ったことがない。高山病や悪天や性悪ガイドに足元を見られたりして、いつも中途敗退ばかりであった。

標高が低いとはいえ、今回初めて曲がりなりにも頂上を踏めたのは「たそがれ隊」の皆さん

の叱咤激励の賜物であるという感慨と、また、“これしき”の標高で高度順応ができていない不甲斐なさがこみ上げてきてない交ぜになり、涙腺のゴムが弛んだのであろう。

ガイドブックによる標準コースタイムは登り2時間、下り1時間半、計3時間半であるが、我々は登り3時間、下り2時間、計5時間を要した。マ、この種のガイドブックは短めに書いてあることが多いし、古稀を過ぎたタソガレにはまあこんなものかも知れないと秘かに自分を慰めている次第である。

ツェルマットでは、ブライトホルン以外にもシュトックホルン(3532m)やオーバーロートホルン(3514m)へのハイキングも行った。ツェルマットでは駅前のキッチン付ホテルに滞在したので、近くのスーパーでビールやワインやステーキ肉を大量に仕入れて来て、毎晩大宴会に明け暮れた。シェフはここでも自称元帝国ホテル総料理長のPancho君が務めた。

さて、次に最後の目的地スイス・グリンデルワルトに歩を進めることにしよう。

ここ暫くのアルプスの天候は5日単位で好悪を繰り返しているようで、グリンデルワルトに入るとまたまた雨空になってきた。天気の方まで「タソガレ」模様になってきたのか。グリンデルワルトの名峰アイガーはグリンデルワルトの村から目の前に見えるが、我々が目指すメンヒやユングフラウはアイガーの陰に隠れて村からは見えないので、とりあえずこれらのベルナーオーバーラントの山並みを見るためにファウルホルン 2681mへハイキングを行った。折からアイガー・ウルトラ・トレイルというトレランの大会があって、多くのランナーが走り登っていた。



(ブライトホルン山頂 正面奥はマッターホルン 稜線の左側はイタリア)

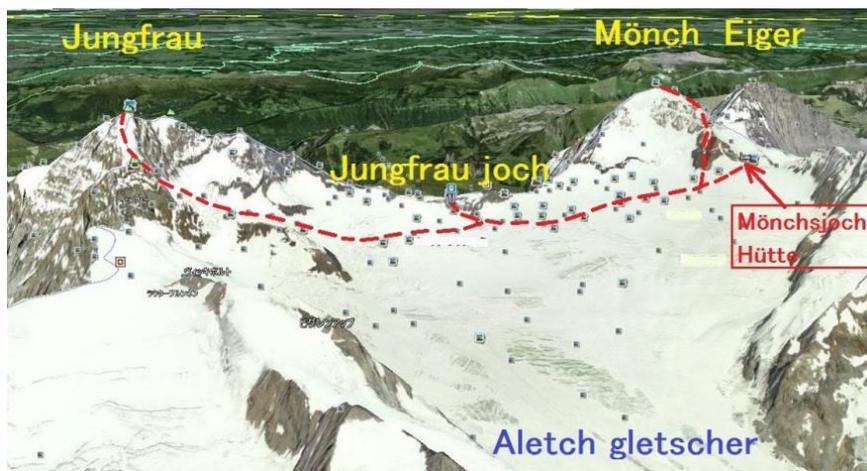


(最奥右の小さなトンガリ山がファウルホルン)

さて、メンヒとユングフラウは、今回のタソガレ隊の最大の目標であった。その計画は、ユングフラウヨッホ駅からメンヒ 4207m に登り、その晩はメンヒヨッホの山小屋に泊まり、翌朝真夜中に小屋を出てユングフラウ 4158m に登りそのままユングフラウヨッホ駅に下山するというものであった。

天気予報では、暫くは雨であった。登山電車でユングフラウヨッホ駅まで登ってみると、案の定周りは全くのホワイトアウトで、ミズレも降っている。この天気では如何ともしがたいので、メンヒとユングフラウ登頂は残念だが諦めて、予約しているメンヒヨッホの小屋に泊まって、そのまま引き返すことにして、兎に角メンヒヨッホの小屋に向けて出発した。小屋までは1時間ほどの平坦な雪道であるが、濃いガスが立ち込めていて足下も定かに見えず、小屋へのトレイルを示す木のポールが僅かに霧の中にボ～と浮かんでいるだけだった。

メンヒヨッホヒュッテは、天気さえ良ければ残雪ハイカーも多いそうだが、今日は悪天のために泊り客は我々とドイツ人の若者1人の5人だけだった。小屋の外にも出られず、何もすることが無かったので、広い綺麗な食堂でビールを飲みつつ窓の外に目をやったが、ガスが晴れることは無かった。



(ユングフラウ)



(メンヒ、右端が南東稜)



(← ↑ メンヒヨッホ小屋)

ところが翌早朝、何と陽が射し始めているではないか。ヒュッテ東方のフィッシャーホルンの山巔が紅く染まり、やがてヒュッテの目の前に聳えるトゥルクベルクの鋭い雪の稜線も輝き始めた。昨夜は新たな降雪があったようで、ヒュッテの周囲には30cmほどの新雪が積もっていて、昨日のトレースは綺麗に消されていた。ふと下の真っ白な氷河に目をやると、雪まみれの2人がアンザイレンで登って来ているのが見えた。このヒュッテに来る通常のルートは我々が来たユングフラウ方面からであるから、この2人は一体どこから来たのか。

聞いてみると、アイガー東山稜から山中2泊してやっとここまで辿り着いたスイス女性2人のガイドパーティーとのことだった。お見事！！拍手で迎えて彼女達の壮挙を心からお祝いました。Ich gratuliere！

我々もここで引っ込んではおられない。彼女達ほどの根性も体力も技量も無いが、折角天気が回復しそうになったので、せめてメンヒだけにでも登ろうではないかと、もう使うこともなからうと昨夜ザックの底に仕舞い込めしまったハーネスやギアを装着して勇んでヒュッテを後にしたのであった。



(ロープもギアも服も凍りついて到着した女性2人組)

小屋から15分くらい戻りメンヒ南東稜の登山口に着いた。昨日は付いていたメンヒ南東稜へのトレースは新雪で綺麗に消えていた。目印となる南東稜の鉄杭が見えたのでアンザイレしてその方向目指して真っ白な雪原に足を踏み入れた。できるだけクレバスを避けるような方向を選んだが、周囲には明らかにクレバスが走っていると分かるヒドゥン・クレバスの窪みが走っていて、心穏やかではなかった。

マ、墜ち込むとすればトップに行くアカさんの確率が高い。お気の毒ではあるが、万が一墜ち込んだ場合には出発前に決めていた「暗黙の了解」(我々の体力では墜ちた人を引き上げる能力はないので、ロープを切り離して捨てて行く)に従って貰うしかない。メンヒに登るパーティーは我々だけで辺りに人気は全く無かったので、彼は「見捨てられて」「凍る体」で永久に残置されるのではあるまいか。



(メンヒ南東稜登山口)

やがて、南東稜の末端に辿りついたアカさんから、ミックスになっている雪が凍っていて、登りは何とか行けるが、下降時に天気が悪化すれば懸垂で下りるしかないが、懸垂の支点が作れるピナクルも見当たらないようだ。また、谷筋に雲が広がり始めたので、天気予報のとおりホワイトアウトになりそうだから「残念だがここで撤退」と決定された。心残りであるような、一方でリタイアできると安堵したような・・・。



(イザッ、撤退!!)

さすれば、ここに長居をすることもない。ユングフラウヨッホへのトレースに出てアンザイレを解いた。未練垂らしくメンヒの頂上を見上げると、アレッチ氷河の源流部が崩壊し巨大な氷河の切断面が

今にも落ちて来そうで肝を冷やした。大きく口を空けたクレバスや深いヒドゥンクレバスの断面も恐ろしい。

さて、メンヒには多少なりとも足を踏み込むことが出来たが、もう一方の“若き貴婦人” ユングフラウには一指も触れることができず、その容色を遥かに仰ぎ見ただけで下山したのであった。

ユングフラウヨッホに辿りつく前に、山は予報どおりのホワイトアウトとなって、登山電車で下山したグリンデルワルトも雨であった。



(アレッチ氷河源頭部の巨大な崩壊跡)



←ユングフラウ 4158m

右下の黒い岩峰が、ユングフラウヨッホのスフィンクス展望台

ユングフラウへのルートは左の氷河をコル迄詰め、右の雪稜から山頂へ

今回は天候に恵まれず、目標4峰のうち当初の目標どおりに登れたのは1峰、目標を変更して登ったのが1峰、途中で撤退が1峰、全く手が付かなかったのが1峰という結果となった。リーダーのアカさんの総評では、ハイキングを行ったことなども勘案すれば、今回は1勝1敗1引き分けとなるのだそうで、マアママの結果かもしれない。下界でもスイスビールやフランスワインや観光も含めて随分楽しめたので、大満足であった。改めて、リーダーをやってくれたアカさんはじめ、S、K両タソガレ氏にお礼申し上げる次第である。

それにしても、ブライトホルンでのあの疲労困憊のザマは一体何だったのであろうか。偶々の高度順応不足にしては、標高が低すぎる。ひょっとして、誰かが冗談で言ったように、もう「筋力」をすっかり「金力」に代替させない限り海外の山(国内も同様・・・)には登れないのかもしれない。或いはまた、どうしても登るといふN先輩のような根性が欠如しているためかも知れない。

どちらにしても、困ったものではある。情けなくて涙がチョチョ切れてくるのでア〜ル。今回の山行は私にとっては、そのような厳然たる現実と^{ゆめまぼろし}夢幻の乖離を叩きつけられた山行でもあった。嗚呼。

(本稿 完)

[⇒「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)